

研究種目：基盤研究（B）	
研究期間：2006～2008	
課題番号：18330148	
研究課題名（和文）	子育て支援現場に適合する愛着形成不全問題への心理臨床的介入技法の開発
研究課題名（英文）	Improvement in psychological intervention techniques for children with attachment problems-focused on the field of child-care support-
研究代表者	
馬場 禮子	
山梨英和大学・人間文化研究科・教授	
研究者番号：50173117	

研究成果の概要：本研究は、子育て支援現場で出会う愛着の形成が気になりな子どもの支援を現場に即して行うために、臨床心理士の専門研修の開発を目指した。子どもの心理社会的発達と愛着の問題を心理臨床的に捉える枠組みについてのレビュー並びに5種類の子育て支援機関の心理職および施設職員を対象とした専門研修のニーズ調査を行った。その結果、愛着形成が気になりな子どもの捉え方が職種間で異なることが見出され、子どもの理解を職種間で共通にすることが重要であると示唆された。以上を踏まえて、臨床心理士、多職種、児童福祉関連施設職員（心理職含む）、保育士に対する専門研修を対象に即して開発・実践を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計	7,800,000	2,340,000	10,140,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：愛着形成不全，子育て支援，乳児院，養護施設，保育園・幼稚園，臨床心理士，専門研修，介入技法の開発

1. 研究開始当初の背景

子育て支援が、全ての家庭を対象として展開される現在、その支援内容は実に多彩である。支援の対象となる家庭が、まさに「全ての」家庭であるために、専門的な心の援助を必要とする人々への対応について、様々な支援機関から臨床心理士の助言を求められることが急増している。臨床心理学は、高度専門性を生かした援助技術の適用拡大を迫られていると言ってよい。

こうした中、臨床心理学の専門性が求められる問題の一つとして、児童虐待の問題があ

る。もちろん親がなぜ虐待をするのか、ということとともに、関係性不全、愛着形成に問題のある子どもの支援も不可欠である。現代日本における子育て支援において、愛着形成の問題に、臨床心理学からアプローチする場合、これまでの実証的研究知見に裏付けられた、愛着形成に関する知見の適用可能性の模索と、臨床的な相談援助技法を子育て支援の相談構造に即して展開するための推敲を行う事が望まれる。

2. 研究の目的

本研究は、臨床心理士の行う子育て支援の高度専門性を明確化し、特に親子の関係性の滞りによる愛着形成の問題について、支援対象者の特性と相談構造に対応した心理臨床的援助技法を検討していくための基礎的な研究である。

これを実現するために、本研究は次の2つのテーマから構成されている。

(1) 子育て支援現場のニーズと臨床心理士の活動の現状を質問紙調査によって把握し、実現可能な臨床的介入について検討する。

(2) 臨床心理学的な介入が強く望まれる親子の関係性障害、中でも愛着形成の問題について、子育て支援の相談構造に即した援助技法と専門研修について検討する。

3. 研究の方法

(1) レビュー： 実証的な愛着研究と臨床研究との断絶と修復の歴史的状況を踏まえ、子どもの心理社会的発達と愛着の問題を心理臨床的に捉える枠組みについて検討した。

次に愛着障害について、過去10年分の文献の検索及び収集を行った。「愛着障害」及び「児童虐待」で検索された文献を、「介入」「治療」「アウトリーチ」などのキーワードを組み合わせ合わせて抽出した結果、計385本の文献が抽出された(検索エンジンは、Psycho-InfoおよびCINII)。これらの文献を概観し、愛着の問題を広く子育て支援の場で取り上げる場合の概念として機能しうるか、その可能性と問題点を検討した。

(2) 質問紙調査： 2007年1月～5月にかけて、5種類の子育て支援関連事業所(乳児院、養護施設、保育園、子ども家庭支援センター、保健所・保健センター)で働く施設職員並びに心理職を対象に実施。乳児院並びに養護施設、一部保育園では、直接質問紙を配布し、その場で回収した。その他事業所については、質問紙を郵送により配布・回収した。総配布数は、管理職491通、心理職416通であり、回収数はそれぞれ管理職が194通(回収率39.51%)、心理職が149通(回収率35.81%)であった。調査内容は、「フェイス」「子育て支援活動内容」「愛着形成が気になり子どもに接した経験」「愛着形成が気になり子どもの臨床像とケアの状況」「愛着形成に関する専門研修の参加経験とニーズ」であった。

(3) 臨床実践： 専門研修の実践を行った。対象と時期は以下のとおりである。児童養護施設などの職員及び心理職を対象にした研修(2007年7月～2008年3月までに5回実施)、保健師などを含む多職種を対象とした研修(2008年12月に実施)、臨床心理士を

対象にした研修(2008年8月に実施)、保育士を対象とした継続研修(2007年7月～2008年3月までに、3回実施)

4. 研究成果

(1) レビュー： 発達心理学では、Piaget, J.の発達論の絶対性が相対化するのに伴って、関係性発達に着目する研究が登場し、メタ理論の転換が起こっていることが捉えられた。ほぼ時を同じくして、精神分析内部では、一者心理学への批判と自己心理学を經由して間主観的アプローチが台頭してきた。この二つの変遷は、間主観的世界への着目という点で共通する。これによって、両者の交流の断層をつなぐ、上位概念を抽出することが可能となった。

次に、二つの領域の架け橋となることが最も期待される、現代愛着研究を取り上げて、内的作業モデルと間主観性の関係について考察した。一連の検討を通して、最も多くの示唆を直接与えることが可能な臨床領域は、親子の関係性への援助である。しかも子どもは乳幼児ほど、親との関わりからの影響が大きい。

そこで、発達のただ中にある子どもたちの愛着に関する問題について、愛着障害という概念を取り上げ、心理臨床的な観点からそれをどの様に取り上げるべきかについて論じた。そこでは、反応性愛着障害は、診断的にも稀なものであり、全ての家庭を対象とする子育て支援の臨床においては、障害という言葉が、一人歩きする懸念があることを指摘した。子育て支援の場で出会う愛着の問題とは、むしろ、健全な愛着の達成が阻害されるような環境にある子どもたちであり、その環境を整えることで、本来の愛着が現れてくるものと捉えることが、現場の他の専門職との協働において役立つものと考えられた。そこで、こうした状況を愛着形成不全と表現し、以後の調査分析、臨床実践において、この概念を使用することとした。

次に、実際の介入について検索された385本から特に乳幼児期に焦点を当てた14本の論文を検討した。そのうち乳児を抱える親へのプログラム実践や、家庭訪問を主な方略としながら、親子の関係性に焦点をあてたり、フォローアップも行ったりしている研究もあったが、数は少なく、愛着の問題への有効な介入に関する実証研究は今後の課題であることが見出された。

(2) 質問紙調査

①対象の属性

在職機関と年齢について職種別に図1・図2に示す。

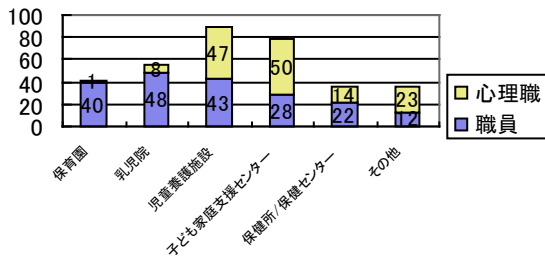


図1 在職機関

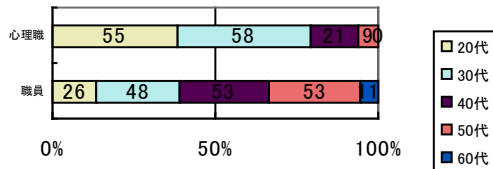


図2 年齢

②臨床心理士の活動の現状

141名の心理職の内、臨床心理士資格を有しているものは、82名。臨床心理士資格を取得してからの平均年数は、47.33ヶ月/3.94年(N=81, SD=48.70, レンジ 0-31)であった。常勤として勤務している臨床心理士は43名、週3日以上非常勤は18名、週2日以下の非常勤は20名、その他1名。各事業所の常勤心理職平均人数は0.68人(N=332, SD=1.46, range=0-11)と非常勤心理職の平均人数は1.01人(n=324, SD=1.96, range=0-20)であった。

以上より、子育て支援機関で働く臨床心理士の現状として、ほぼ一人職場であること、資格取得年数が短いこと、非常勤が半数以上を占め、身分の不安定さが明らかとなった。

③子育て支援活動の実際とニーズ

各機関での今後力を入れたい支援対象を、図3に示す。

乳児院・養護施設では、子ども支援に対するニーズが高く、その他の機関では親支援へのニーズが高いことが示された。

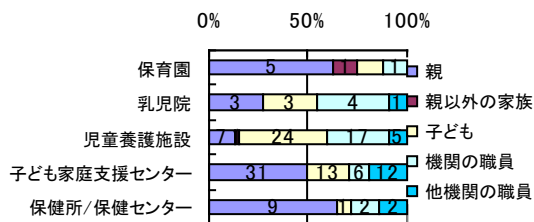


図3 今後力を入れたい支援対象

④専門研修の実態

愛着形成に関する問題を取り上げた研修の受講経験と臨床心理士資格の有無については表1のとおりである。

表1 CP資格の有無と研修経験のクロス表

	研修経験		計
	あり	なし	
CP資格あり	41	38	79
CP資格なし	24	33	57
計	65	71	136

研修の機会を得ている場所については、所属機関内が26名、所属機関外が58名であった。

以上より、研修の機会を得ている心理職が半数未満であること、そのほとんどが外部の研修機会を利用していることが示された。

⑤専門研修で取り扱う内容についてのニーズ

専門研修で取り扱ってほしい内容に関する自由記述をKJ法によってまとめた。

その結果、研修形態としては、講義、事例検討が多く、ビデオを用いた研修や教育プログラム、ロールプレイなどの実践的な研修が挙げられた。研修で取り扱う内容としては、幼児期の愛着の問題がその後の発達プロセスにどう現れてくるのかなどを含む基本的な理論、見立て、子への具体的援助技法、親への対応、他職種との連携の仕方が挙げられた。

心理職と職員を比較すると、心理職では、発達プロセスに関するもの、他職種との連携の仕方を希望する割合が高く、職員では子への対応を挙げる割合が高かった。

⑥援助専門職が捉える愛着形成不全の子どもの臨床像

愛着の形成が気になり子どもの増減について、ここ5年間の印象と今後の予想という観点からデータを収集した。職種にかかわらず、7割以上の専門職が過去5年間で愛着形成に問題を抱える子どもが増えているという印象があり、なおかつ今後もそのような子どもが増えると予想していた人が8割以上だった。

援助専門職が捉える愛着形成不全のイメージを明らかにするために、愛着形成気になり尺度(13項目)について、探索的因子分析(最尤法、バリマックス回転)を実施した。その結果、13項目中6項目を除いた7項目3因子構造として解釈することが適切であろうと判断された(表2)。項目の内容から、因子1は「依存的態度」、因子2は「回避的態度」、因子3は「挑戦・攻撃的態度」と命名した。除かれた項目を表3に示す。

表 2 探索的因子分析

因子名	項目	共通性	因子		
			1	2	3
依存の態度 $\alpha = .70$	d 養育者に極端な依存を示す。	.52	.70	-.04	.14
	f 要求が多い	.58	.62	-.09	.41
	h 養育者を離したくないことから過剰な接触欲がある (養育者を安全基地とした探索行動がみられない)。	.34	.58	-.02	.05
回避の態度 $\alpha = .78$	c 援助が必要なときでも養育者を求めたり、利用したりしない。	.65	-.02	.81	.01
	b うちのめされたり、傷ついたり、病気のときに養育者になぐさめを求めようとする。	.58	-.08	.75	.05
挑戦・攻撃的態度 $\alpha = .64$	e 養育者の要求に素直に従わない(攻撃的あるいは反抗的無視)	.53	.07	.09	.72
	i 養育者のすることを、なんでも充に自分から攻撃的威圧的にコントロールしようとする。	.46	.25	-.00	.63

因子寄与率 72.61%

表 3 除かれた項目

- j 養育者に対する過剰な気遣いや、不適切な世話を行動がみられる。
- k しばらく離れていた養育者と再び会ったとき、相互作用を確立しようとし(明らかに無視したり、過剰な怒りをぶつけたり、愛情がまった感じられないなどを含む)
- a あたたく(情愛に満ちた相互関係を護とも持たない)
- g 見知らぬ状況でも養育者をかえりみようとしない(迷子になることも多い)。
- l 養育者や保護者に身体的接触をあまりにも多く求めるか、反対に身体的接触を嫌う。
- m 知らない大人に対して無差別的な愛情表現(誰にでも抱きつくなど)がある。

以上より、援助専門職が捉える愛着形成が気になりな子どもの臨床像、すなわち、愛着形成不全のイメージの総体は、二者関係の取り方の不自然さとして捉えられていることがわかる。また、Zeanah (1993) の提唱する Attachment disorders の各下位タイプの代表的な行動の記述が探索的因子分析の過程で除かれたことは、こうした概念と現場における認識のギャップを示唆しているといえよう。

次に、上で得られた3因子について、項目得点を合計し、項目数で除したものを尺度得点とした。愛着形成不全のイメージのパターンと職種に差があるかどうかを検討するために多変量分散分析 (MANOVA 反復測定モデル) を行った(図 4)。被験者内要因・被験者間要因のいずれの主効果も有意ではなかったが ($F(2, 402) = .48, n.s$; $F(1, 203) = 1.61, n.s$)、交互作用が有意傾向であった ($F(2, 406) = 1.48, p = .06$)。そこで、単純主効果の検定を行った結果、「挑戦・攻撃的態度」において、心理職が職員よりも 5%水準で有意に高いことが見出された ($F(1, 203) = 6.34, p = .01$)。

以上より、心理職は愛着形成不全のイメージを挑戦・攻撃的態度が前景に来る形で捉えていることが示された。これは、たとえ同じ子どもを目の前にしても、どの行動を愛着形成不全の重要なサインと捉えるかについては職種で違いがあることを意味する。心理職は比較的短時間の関わりが多く、職種による

関わり方の違いも影響しているだろう。それゆえに、職種間での子どもの問題の捉え方の違いをいかにつなげて、共通理解を促していくかが、他職種と協働する際の課題といえよう。

MEASURE_1 の推定周辺平均

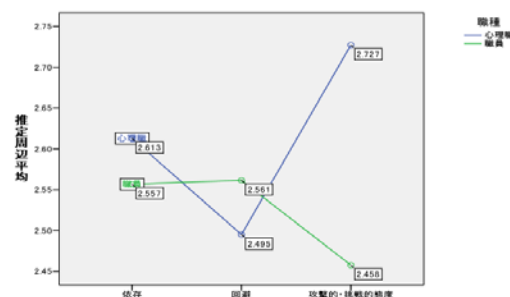


図 4 職種別愛着形成不全のイメージパターン

⑧考察

以上の結果より、①子育て支援現場で働く臨床心理士の現状として、経験年数が浅いながらもほぼ一人職場であること ②愛着形成が気になりな子どもが実際に増えてきていること、それにも関わらず、③愛着形成の問題を扱う専門研修の経験は乏しく、経験の浅い臨床心理士でも愛着の問題にきちんと対応できるような、専門研修を整えていくことが急務であることが明らかとなった。専門研修の内容は、基本的な理論はもちろんのこと、多職種間で事例を検討し子どもの理解を共通にすることが第1であると思われる。その上で、ニーズとして挙げられた親支援、子どものケア、コンサルテーション等を扱うことが適当であろう。

(3) 各種専門研修の実践

上記調査結果と臨床像の自由記述などの結果を検討した上で、愛着形成不全の問題をテーマとした専門研修を①児童福祉関連施設の職員および心理職、②多職種、③臨床心理士、④保育士を対象に行った。それぞれの研修特性に着目して、研修の概要を示す。

① 児童福祉関連施設職員および心理職

2007年-2008年に、愛着形成がまさになされる生活場面に着目し、発達環境構成を検討するワークを中心としたプログラムを試験的に開発した。

臨床現場は、子どもと生活を共にする場で展開しており、心理臨床的に見れば、愛着形成について治療的な介入が必要な子どもが多いことは事実である。しかし、個別の対応にも増して、食事、着替え、入浴、就寝、あるいは、子どもが自由に過ごす時間など、子どもの主観的な体験として、どれほどの安全感、安心感が得られているのか、子どもの視

点に立ち返って点検した。そして、極端な依存や挑発行動の制限技法に加えて、愛着形成に重要な、自らが環境に働きかけて、発達機会を作り出すための、安全基地としての環境作りを職員が共同して作り上げるための手だてを検討した。

とかく、問題行動への対処に追われがちな毎日の中で、生活の様々な資源を見いだし、子どもの自律を保障する関わりについて検討することが、結果的に愛着形成を促進しているのだという洞察を多くの職員が得た。

② 多職種

2007年12月に、子育て支援現場で働く多職種を対象とした専門研修を行った。参加者の所属機関は、保健所、市役所、保育園、病院精神科、児童相談所、教育機関であった。専門研修は、愛着形成不全に関する基本的な講義・ワーク（愛着形成気がり尺度を使用し、愛着形成不全へのイメージを具体的にすることを旨とする）および保健所で出会った愛着形成不全が疑われるケースの事例検討を行った。親支援を地域の誰がどのような立場から行うか、つまり地域という視点から多職種が連携しケースに関わることの重要性と地域で果たされる各職種の役割などが討論のテーマとなった。参加者からは、改めて自分の職業の役割を考えさせられたという感想が多く寄せられた。

③ 臨床心理士

2008年8月に、臨床心理士を対象とした専門研修を行った。愛着形成不全への対応—心理職の対応を巡って—という演題で基礎的な講義およびワーク、その後二つの治療構造の異なる事例が報告された。

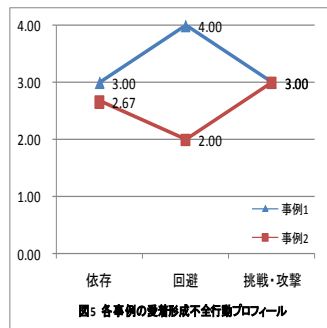
様々な領域で働く臨床心理士が愛着形成不全という視点からいかにクライアントを理解し、他の専門家と連携をするかということが中心に議論された。議論のテーマは、①愛着はまず特定の人物と形成すべきかどうか、②愛着関係と他の人間関係はそれぞれどのような意義を持っているのか？③愛着という視点の意義は何か、であった。

多くの臨床心理士が愛着理論や愛着研究に興味を持っていると思われる。その一方でどのようにその理論や研究成果を臨床現場に生かして良いかわからないというのが実情のようであった。そうした状況の中で今回は基礎理論の講義の後に治療構造の異なる二つの事例検討の後、長時間の討論を行うことができた。難しい事例に対して「愛着形成不全」という視点からの討論を行ったことは、今後臨床心理士が他職種と共にそれぞれの専門性を生かす形で連携しながら、さらに有効な援助を考えていく上で貴重な機会となったと思われる。

④ 保育士～継続的なコンサルテーションの形式を併用した研修会～

X市私立保育園研修会にて縦断的にコンサルテーションを行った（年間3回）。2事例は、年長・男児、家族との別離体験があるか、家庭の養育機能の低下が推測される事例である。愛着形成気がり尺度プロフィールによると事例1は回避的行動が前景として、事例2は挑戦・攻撃的態度得点が前景として捉えられていた（図5）。コンサルテーションでは、子どもの特性にあわせて保育環境を整えることを通して、愛着形成発達を促すことを目指した。また、親支援へのニーズが高いので、園が親と子をつなぐための方略を提案することを目指した。

各事例の概要、愛着形成不全に対する支援の実際と就学後の状況について記す。



[事例1] 両親とも精神疾患、母子分離、養育放棄状態。保育士の主訴は、暴言・暴力、保育室からの飛び出しへの対応であった。保育士は本児に安心

感がないと思い、1対1で関わってきたが、怒りを感じることも多かった。さらに秋以降に担当が多忙になると、児は急に挑戦的になり、対処に苦慮した。

検討を通して、児は理不尽な怒りをぶつけられて育ち、情動を親に調整された経験に乏しく、その暴言・暴力の背景に怒りに対する恐怖心があることを確認した。まず、親と園との関係が繋がっていないことを扱い、①父と面談し、児が家庭で最低限のケアをされる状況を作ることを提案した。また、②暴言暴力を「怒りの表現」「援助を求めるサイン」と読み取り、感情体験をともに共有する時間を持つことを提案した。秋以降は、③爆発する前に保育士に助けを求めに来よう約束し、④部屋を飛び出した本児にとって「中間体験」ができるよう、時間の枠組みを設定、約束をし、「待っている」と声掛けを行い、約束を守れたことをほめる対応を提案した。また、⑤他機関との連携を行い、園だけで児を抱えないよう提案した。研修を通じて保育士は、児の暴力の背景を理解したことによって、本児に対して感情的にならず、対応できるようになったと振り返った。

児は、卒園まで、家族の状況変化が起こると暴力は見られたが、保育士に助けを求め、怒りを言葉で伝えるようになり、飛び出した

部屋に自分で戻るようになった。卒園式には最後まで列席した。就学後は、班長の役目を果たし、学級内でよい状態である。保育士の顔を見に来るなど、園は愛着基地の役割を果たした。課外活動では、集団から飛び出した子どもの傍によって声を掛け、一緒に集団に戻る姿が見られた。

[事例2]虐待疑いの通報あり、親に精神疾患、父とは別居。児が母の心理状態に応じて急に暴力的な状態となること、母から保育士に頻回に相談されることへの対処を主訴としていた。これまで、園では乳児期より児は「理由なく手を出さない」と捉え、1対1で丁寧に関わってきた。かつて、園から逃げ出すこともあったが、現在は園に守られた感じがあり、信頼関係ができていた。しかし、母は、家では手がつけられないと訴えている。

心理職は親子をつなぐことをめざし、①母と保育士の相談の枠組みを作り、家での取り組みを具体的に約束し、入園からの児の育ちをまとめることを提案した。秋には園で家族が集まる機会があったため、②母の頑張りをねぎらい、母が大事にされるよう配慮することを提案した。また、児に対し、③パニックが自然に治まるのを待つのではなく、不安を治める声かけを行い、早めにパニックから回復させることを検討した。

卒園までに、母の入院を経験しながらもパニックは減少し、友達関係が広がった。就学後、多少乱暴なときもありながら、穏やかに過ごしているようだ。園には、きょうだいを迎えにくるが、笑顔でいることが多い。周囲の支援によって母親の状態が安定している。

以上、保育士へのコンサルテーションにおいて心理職は、①園が家族全体にとって安全基地となるよう、事例に応じて園と家族をつなぐ方略を提案する、②子どもの行動の背景にある心理状態の読み取りを行い、発達促進的な関わりを提案した。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者は下線）

〔雑誌論文〕（計16件）

- ① 馬場禮子，精神分析の実証研究について—効果測定を中心に—，精神分析研究，査読有，52（1），2008，1-5.
- ② 青木紀久代，親乳幼児心理療法における精神分析的発達理論と愛着理論—インターフェイスとしての間主観的観察—，精神分析研究，査読有，52(1)，2008，41-53.
- ③ Jonathan Picken，青木紀久代，山下洋，川崎二三彦，シンポジウム「イギリスから学ぶ児童虐待対応」，こどもの虹情報研修センター紀要，査読無，6，2008，33-56.

〔学会発表〕（計33件）

- ① 馬場禮子（企画），心理臨床学の新たな貢献を目指して，心理臨床学会第27回大会，2008年9月7日，つくば（つくば国際会議場）.
- ② Minamiyama, K.，Aoki, K.，Kimura, E.，Baba, R.，Hanta, S.，Yomo, Y.，Masuzawa, T.，& Ota, S.，Clinical support for children with attachment problems: The present situation and issues at Child Welfare Institutions in Japan., World Association for Infant Mental Health – 11th World Congress, 2008年8月3日，横浜（パシフィコ横浜）.
- ③ 南山今日子，青木紀久代，馬場禮子，繁多進，四方耀子，増沢高，太田沙緒梨，木恵理，子どもの愛着形成不全への心理臨床的支援～乳児院と児童養護施設における子どもの愛着形成の実態と取組の比較検討～，日本子ども虐待防止学会第13回大会学術集会みえ大会，2007年12月5日，三重（三重総合文化センター）.

〔図書〕（計7件）

- ① 馬場禮子，岩崎学術出版社，精神分析的人格理論の基礎—心理療法を始める前に—，2008，218.
- ② 繁多進（分担執筆），朝倉書店，アタッチメントと行動発達，南徹弘編「発達心理学」，2007，95-112.
- ③ 青木紀久代（編著），みらい，発達心理学—子どもの発達と子育て支援—，2007，181.

6. 研究組織

(1)研究代表者

馬場禮子（BABA REIKO）
山梨英和大学・人間文化研究科・教授
研究者番号：50173117

(2)研究分担者

青木紀久代（AOKI KIKUYO）
お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：10254129

(3)連携研究者

繁多進（HANTA SUSUMU）
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：10018038
三上謙一（MIKAMI KENTICHI）
北海道教育大学・保健管理センター・講師
研究者番号：90410399
太田沙緒梨（OTA SAORI）
山梨英和大学・人間文化学部・助教
研究者番号：90440544